

大学都市イエーナと秘密結社

北 原 博

要 旨

本論では、イエーナにおけるフリーメイソンや他の秘密結社の歴史、ヴァイマル政府の対秘密結社政策、そして18世紀ドイツにおける秘密結社の文化史上の意義について考察したい。

18世紀後半に秘密結社が興隆するのはイエーナに限ったことではないが、大学と秘密結社のメンバーが密接な結びつきを持っていたという点は大学都市イエーナに特徴的なことであった。しかし、高位階の導入と共に学生はフリーメイソンから経済的に排除され、同郷人会や学生結社が学生の結社活動の中心になる。イエーナを支配していたヴァイマル政府や政府高官であったゲーテは、学生による危険性を考慮して秘密結社設立には反対してきた。

この地のイルミナーティもまた大学教授や学生を結社に加入させてきた。この結社は公的に解散を宣言した後、ヴァイマルとゴータが結社の中心となって活動を継続していたのであるが、イルミナーティのネットワークは、活躍の場を見出せない有為な若者にイエーナやヴァイマルでの活動の場を提供し経済的に支援することで、思想・文化の発展に寄与している。ラインホルトの生涯からは、ウィーン、ヴァイマル、イエーナ、さらにはベルリンやキールを結ぶ結社のネットワークの存在が浮かび上がってくる。出版や旅行、文通は18世紀文化を展開させた情報ネットワークとしてしばしば取り上げられるが、秘密結社もまたこうしたネットワークの一部であることが認められるのである。

キーワード：秘密結社、フリーメイソン、イエーナ、ゲーテ、ラインホルト

はじめに

秘密結社は18世紀後半のドイツ文化を考える上で無視することのできないネットワークである。当時、多くの文化人、政治家らが結社に属し、まじめに、今日の我々から見れば荒唐無稽な儀礼を執り行っていた。こうした事実について、秘密結社に対する偏見や誤解、そして情報の少なさからか、まともに取り上げられることは稀であった。近年、ドイツやオーストリア

では秘密結社研究が急速に進展しつつあるが、日本では秘密結社への言及は僅かで、しかも日本語で参照することのできる文献は、イギリスやフランスのフリーメイソン (Freimaurer) についてのものばかりであり、イルミナーティ (Illuminatenorden) や厳守派 (Strikte Observanz) といった、18世紀ドイツの秘密結社の実情を知るうえで不可欠な要素に本格的に取り組んだものは稀である。本研究では、18世紀後半のドイツ文化研究のための基礎研究と

して、フリーメイソンを中心にドイツの諸都市における秘密結社の状況を具体的に叙述していく。もちろん都市ごとに結社の実情を調べていくのではなく、ドイツという大きな括り方で各結社について検討していくという方法も考えられるが、秘密結社の展開は都市の現実と密接に結び付いており、ドイツという一般的な叙述では捨象されてしまうものが多い。そこで本研究では文化史上重要なドイツの都市を取り上げていくことで、全体として18世紀ドイツの秘密結社の実情が浮かび上がるようにしたいと思っている。本論はそうした研究の一環として、大学都市イエーナを取り上げることにする。

イエーナには1557年設立の歴史ある大学があり、ゲーテ時代にはヴァイマルを中心にゴータなど4つの小国が運営にあたっていた。ヴァイマル政府高官であったゲーテと密接な関わりのある都市であるばかりでなく、シラー、フィヒテ、シェリング、ヘーゲルらがこの都市で大学の教壇に立ち、イエーナ・ロマン派の中心地でもあった。つまり、イエーナは18世紀ドイツの文学・思想にとって非常に大きな意味を持つ都市なのである。

ベルリンの啓蒙主義者ニコライ（Friedrich Nicolai, 1733-1811）は、1781年のスイス旅行の途上に立ち寄ったこの大学都市について旅行記に書き記している。それによれば、「この町の通りはほとんどまっすぐだが、家屋は大きさの割には快適ではない古風な家である。人口は多くはない。というのも都市と郊外には816棟の家があり、（そして穀倉が127ある）、そこには6000人の人口があるとしているが、実際にはそんなに多くはないのだ」¹⁾。しかも、当時学生がおよそ500人おり、都市の構成員の相当程度を占めていた。学生数500人は当時としては決して少ない数字ではない。18世紀末のドイツの学生数は6000を下回っており、しかも大学自体の数は約30であったというから、イエーナは比較的規模の大きい大学であった²⁾。では、当時のイエーナの経済状況はどうだったのだろう。ニコライの記述からは、豊かではなく、大学に依存する町の状況が伝わってくる。「この町にはみるべき産業はほとんどない。むしろ市民たちは、とるにたらぬ農業、わずかばかりのわ

さび栽培、少しばかりの畜産と並んで、カラスたちがエリヤにしてくれたように、餌を運んでくれる学生たちがする浪費だけに期待しているのだ」³⁾。

この都市でもまた他のドイツの都市同様に、都市の教養層の多くは秘密結社と関係を持っていた。本論では、18世紀ドイツ文化にとって極めて重要なこの大学都市における秘密結社の歴史を明らかにすると共に、イエーナを監督する立場にあったヴァイマル政府の対応を政府高官であったゲーテの政治文書から検討してみたい。さらに、イエーナゆかりの秘密結社員ラインホルトを例にとりながら、都市文化の形成において秘密結社が果たした役割の一端を明らかにすることで、秘密結社の文化史上の意義に触れたい。ただし、秘密結社のネットワークや活動には不明な点も多く、決定的な証拠を提示することは出来ないが、思想・文学の展開に秘密結社人脈が関与しているならば、このつながりは重要であると考えられるのである。

1 イエーナのフリーメイソン

イエーナのフリーメイソンの歴史は1744年末ないしは45年初め⁴⁾にまで遡る。ベルリンのロッジ「3つの地球」(Zu den drei Weltkugeln)の許可を受けて、7人のメンバーがイエーナにロッジ「3つの薔薇」(Zu den drei Rosen)を設立した。特筆すべきは、設立メンバー7人の内少なくとも4人がハレの法学生として学籍登録しており、その内の2人が1744年冬学期にイエーナ大学に学籍登録していることである⁵⁾。47年6月には設立メンバー7人を含め39人がロッジに所属していたが、うち22人は1741～46年の間に、3人は41年以前にイエーナ大学に学籍登録をしており⁶⁾、大学の構成員が中心のロッジであった。時期は異なり単純に比較は出来ないが、首都ヴァイマルのロッジでは1781年にメンバー55人中官吏が23人、教授及び学生が各2人⁷⁾であることを考えると、大学都市と首都という都市の性格の違いが顕著に現れていると言えよう。

最初期のロッジ活動はイギリスのメイソンに

倣って、徒弟、職人、親方の基本3位階のヨハネ・ロッジであったと考えられている。しかしこの時代ドイツでも急速に高位階⁸⁾が普及しており、イエーナもまた当時流行のクレルモン派(Clermontkapitel)の高位階システムに加わる。そのイエーナのロッジに1763年にヨーンゾン(Georg Friedrich von Johnson-Fünen, 本名 Johann Samuel Leucht, 1775年没)なる詐欺師が現れ、自分は聖堂騎士団の騎士であり、間違っただけでフリーメイソン運動を終わらせ、ドイツのロッジを正しい聖堂騎士団の慣わしに倣って改革するために遣わされてきたのだと称し、イエーナの高位階を掌握した⁹⁾。さらに彼はドイツのクレルモン派の改革者ローザ(Philipp Samuel Rosa, 生没年不詳)との対決を試み、ローザの虚偽性を暴露して失脚させたのである。ところが当時勢力を伸張していた厳守派と歩調を合わせるため、1764年にイエーナ近郊のアルテンベルグで会議を行うが、この会議で自らの虚偽性を露呈して逃走を図ることになる。彼自身はプロイセンによって逮捕されたが、ヴァイマルに引き渡され、当時イエーナのロッジ・マスターであり、ヴァイマル政府の枢密会議の一員でもあった参事官フリッチュ(Jakob Friedrich Freiherr von Fritsch, 1731-1814)によってヴァルトブルク城に終生監禁されることになる。このスキャンダルが原因となってイエーナのロッジ「3つの薔薇」は1764年に閉鎖されるのである。

アメリカのゲーテ研究者ウィルソンはヨーンゾン事件の処理について、何故わざわざプロイセンに逮捕されたヨーンゾンを引き渡させて幽閉したのか、その理由に疑問を呈する。ただ単にヨーンゾンの詐欺によってかかされた恥を糊塗するためであるのならば、ロッジの閉鎖までは必要ないとウィルソンは考えるのである¹⁰⁾。そこでウィルソンは、ヨーンゾン事件が次のような政治的性格を持っていたと主張する。まず、ヨーンゾンは民兵を組織して、ロッジの重要人物である自分を迫害しようとしているプロイセン王フリードリヒ2世に対して戦いを挑もうとしていた。さらに、ヨーンゾンの活動はイエーナに限定されるものではなく、ドイツのみならず、デンマーク、スウェーデンの主要ロッジに

ベルリンのロッジとの断絶を要求し、大きな成果を収めていたために、裁判によってヨーンゾンのロッジ活動が明らかになればベルリンとヴァイマルの外交問題に発展する可能性がある。最後に内政上の問題として、ロッジ・マスターであった大臣フリッチュは、自分の不在中にベルリンからの規約文書の処分が行われたことについて、政府のロッジ監督者である自分の権限を無視するものであると見なしたというのである¹¹⁾。

しかし、イエーナのロッジを閉鎖した後、同じ年、首都ヴァイマルに公妃アンナ・アマリアの名を冠した「アンナ・アマリア、3つの薔薇」(Anna Amalia zu den drei Rosen)を設立しており、その初代ロッジ・マスターには、イエーナのロッジ・マスターでもあった枢密参事官フリッチュが就任している。しかし、ロッジ開設の許可はイエーナのロッジが加入していたクレルモン派ではなく、ヨーンゾン事件の当事者でもあったフント男爵の厳守派に求めている。

もし、ウィルソンが主張するように、イエーナのロッジ閉鎖にはベルリンへの政治的配慮があるとするのならば、代わりに設立されたヴァイマルのロッジがベルリンの「3つの地球」ロッジとは異なる高位階システムに加わったのは不自然である。厳守派の許可を受けたヴァイマルのロッジ設立は決してベルリンへの配慮にはなっていないのである。イエーナのロッジはヨーンゾン事件のためにフリーメイソンとしての正統性を失っており、イエーナのメイソンたちは新たな大ロッジの傘下に入る以外に活動を継続する道はなかった。ローザの一件でベルリンのクレルモン派も疑わしいものとなった今、ドイツで大きく勢力を伸張していた厳守派への加盟を求めたのは当然の帰結である。クレルモン派の勢力争いでの敗北は決定的となっており、ベルリンの「3つの地球」ですら、ヴァイマルのロッジに遅れて1766年に厳守派に属することになる。こうしてヴァイマル公国のフリーメイソンの中心はイエーナからヴァイマルへと移る。

イエーナのロッジは設立当初学生や大学教員によって発展し、同郷人会(Landsmannschaft)

のような地縁的で、学生生活のサポートを主眼とした利益団体とは異なり、個の完成への努力、共同体での各自の能力の展開といった新しい価値を実現する要素が大きな場を占める¹²⁾。しかし高位階の普及はロッジの構成員に変化をもたらすことになる。高位階はロッジ活動の内容だけではなく、加入条件にも変化をもたらしたのである。つまり、入会金や会費が高騰することで、ロッジには富裕層が増加し、学生は経済的に排除されることになる¹³⁾。そうした背景もあり、擬似メイソンのアカデミック・ロッジが作られていく。こうした結社には学生のみならず、大学教授らが加わっており、大学都市イエーナのフリーメイソンが当初持っていた特徴が受け継がれたのである。

アカデミック・ロッジのひとつとしてロッジ「赤い石」(Zu rothen Stein) を挙げることができる。このロッジは7つの位階を持ち、神への真の畏怖、真の人類愛、他者が良き振る舞いをする気になるような手本となることを掟とし、人類の不調和と不幸の根絶を目的とする¹⁴⁾。アカデミック・ロッジの主要メンバーは学生であり、当時の学生はしばしば大学を移動したので、例えばアカデミック・ロッジのひとつである「希望団」(Esperanceorden) はこうした学生によってゲッティンゲン、ハンブルク、シュレースヴィヒへと拡大していった¹⁵⁾。しかしこうしたアカデミック・ロッジも1767年には同郷人会とともにヴァイマル政府によって禁止されることになる。

2 国家の中の国家： 政治家ゲーテの秘密結社観

2.1 厳守派とイルミナーティ

1807年11月4日、元商人メッツェル(Metzel)がベルリンを模範にしたフリーメイソンのロッジをイエーナに設立する許可をフォイクト(Christian Gottlieb Voigt, 1743-1819)に求めた。この問題についてゲーテは12月31日付の所見にまとめているが、その中でゲーテは、この問題にはあまりにも考慮すべきことが多いので口頭での報告が必要であるとし、いく

つかの点だけを書き送ると断った後に、次のように断定している。

フリーメイソンリーはどうしても国家の中の国家を作る。もしそれが一度導入されれば、政府はそれを支配し無害化しようとするだろう。メイソンリーのなかった所にメイソンリーを導入することは、決して勧められない¹⁶⁾。

「国家の中の国家」という表現がはじめに使用されたのは、フランスのユグノーに対してであり、18世紀末にはユダヤに対する非難の言葉として使用されている¹⁷⁾。国家の中に国家とは別の権力機構が存在する、これは封建君主にとっては許容することのできない問題である。強い調子での断罪は、ゲーテのフリーメイソンへの態度が否定的であったことを証明しているように思われる。果たしてフリーメイソンに対するこの非難は正鵠を射たものであろうか。

ゲーテが属していたヴァイマルのフリーメイソンのロッジ、「アンナ・アマーリア、3つの薔薇」は1782年に活動を停止してしまっているので、彼自身が体験したフリーメイソンは具体的には四半世紀前のものである。このロッジは当時ドイツのフリーメイソンの最大勢力であった厳守派に属していた。厳守派は高位階システムの1つで、フント男爵(Karl Gotthelf Reichsfreiherr von Hund und Altengrotgau, 1722-1776)がパリで聖堂騎士団の第7管区(ドイツ)の管区長に任じられたという話に基づく。厳守派では各管区長の上に位置する隠密首領に対する絶対的な服従が求められており、国家権力とは別の権力機構を持っていたといえる。結社員は行為の目的や意図を解明しようとはせず、ただ命令に服従し、黙秘義務を負い、善導のために上位の者から課せられる罰は黙って受け入れなくてはならなかった¹⁸⁾。そして下位のメイソンには知らされていない長期計画があったのである。厳守派は新しい国家の建設を目的としていた。それは専制主義を排した貴族主義的な民主国家で、法に従った結社の評議会が統治する国家である¹⁹⁾。結社の会費はそのための財源であり、さらに企業によって資金を調達して、アメリカに結社のコロニーを作ろうと計画して

いた。下位の結社員はこの計画のための資金源だった。厳守派がこのような組織であった以上、専制国家の中で進められる新国家設立計画は無視できるものではなく、ゲーテの「国家の中の国家」という非難も不当なものとはいえない。しかし、1807年には状況は全く変化している。当時、厳守派はすでに解体しており、ゲーテもまた友人ヘルダー（Johann Gottfried Herder, 1744-1803）が協力して成立した「とても理性的な、シュレーダー・システム」²⁰⁾の存在を知っていたのである。

しばしばフリーメイソンの一派と混同される秘密結社イルミナーティでも厳守派同様に服従が求められた。イルミナーティは本来フリーメイソンとは別個のもので、インゴルシュタット大学教会法の教授ヴァイスハウプト（Adam Weishaupt, 1748-1830）が、バイエルンで強い影響力を行使していたイエズス会に対抗するために学生を組織して作った秘密結社であった。この結社にクニッゲが加わってから、組織や儀礼がフリーメイソンの性格を強め、フリーメイソンを結社に勧誘していくことで、フリーメイソンのロッジの内部に侵入していった。とりわけ1782年のヴィルヘルムスバートのフリーメイソン会議で、これまで圧倒的な勢力を誇っていた厳守派の伝説が否定され、厳守派自体が崩壊に向かっていった時期に、多くの指導的フリーメイソンたちをイルミナーティに取り込むことに成功していった。ヴァイマルにおいても厳守派をめぐるロッジ内部の対立をきっかけにロッジが活動を停止すると、厳守派メイソンの中心人物であったボーデ（Johann Joachim Christoph Bode, 1730-1793）が君主カール・アウグスト（Carl August, 1757-1828）やゲーテを高位階に昇進させ、さらにイルミナーティへと加入させた。そしてゲーテやカール・アウグストは結社の全ての議事や決定に関与することになる²¹⁾。

1784年バイエルンでイルミナーティ弾圧が始まり、イルミナーティの指導者シュトルベルク＝ロスラ（Johann Martin Stolberg-Rossla, 1728-1795）が1785年4月に結社の解散を宣言した後も、ヴァイマル及びゴータのイルミナーティが中心となって1790年頃まで活動を

続けていた²²⁾。その中心となったのがボーデであり、ボーデは自由と平等をスローガンにイルミナーティの活動をフリーメイソンの改革と位置付けていた。ここで言う自由とは大ロッジや高位階システムの後見からの自由であり、平等とはロッジ相互の平等であり、ロッジの内部での結社員相互の身分を越えた平等を意味する²³⁾。しかし、こうした活動も1787～93年には大きな成果を裏付ける資料は残っておらず、ボーデの死（1793年）をもって頓挫すると考えられているが²⁴⁾、シュトラーの見解では、ボーデの努力はシュレーダーらのフリーメイソン改革に結実することになる²⁵⁾。

1780年代後半について、ゲーテがイルミナーティの結社員として活動を続けていたのかということについては、資料からは結社活動を裏付けることができず、はっきりしない。それどころか1789年3月にイエーナでロッジ設立計画が持ち上がったときにも、ゲーテの態度は否定的であった。ゲーテは君主カール・アウグストに対して1789年4月6日付の手紙で、「ベルトゥフは直ちにそんな考えを変えましたし、フーフェラントの考えも正しました。ボーデからこのおもちゃを簡単に取り上げるには、ボーデはあまりにもしかとこれにしがみついております」²⁶⁾と書き記し、設立を断念するよう説得していることを報告している。なお、この手紙に挙がっている3人の内、フーフェラント（Christoph Wilhelm Hufeland, 1762-1836）とボーデはイルミナーティであることが確認されている²⁷⁾。しかし1788年3月にイルミナーティという名称は使わないことを決めており²⁸⁾、しかもボーデらはフリーメイソンの改革を目指していたので、1789年の設立計画はイルミナーティによるフリーメイソン改革計画の一環と見るべきであろう。

このイルミナーティの計画をゲーテは断念させようとしているわけであるから、ゲーテは政府高官としてイルミナーティに対して抑圧的な姿勢をとっていたように思われる。しかし、ゲーテはボーデに対して「誠意を尽くして事情を説明」²⁹⁾している。その事情とは何か。それは後で言及するように学生との関係である。1807年の所見でゲーテははっきりと、「学生のために

生じる危険を全く考えていない、このことは以前には常に要点であったし、そのためにイエーナでは全てのメイソンの関係が拒絶されたのであった³⁰⁾と述べており、秘密結社そのものというよりも、学生との結び付きこそが1789年にもイエーナのロッジを認めなかった理由なのである。しかも、この時の申請却下は政府の正式な決定ではなく、内密に処理されており、ロッジの設立申請者に対する配慮が伺えるのである。

ウィルソンはヴァイマル政府の対秘密結社政策は、すでに言及した1764年のイエーナのロッジ閉鎖以来一貫して抑圧政策であり、政府はロッジを監視してきたと主張する。そして1807年のロッジ開設問題でもこの立場は変わっていないとしているが³¹⁾、こうしたウィルソンの見解に対して、ヨアヒム・パウアーとゲアハルト・ミュラーは、1807年当時の政治状況がゲーテの否定的な結論に繋がっていると反論している。もしヴァイマル政府の政策がイエーナのロッジが閉鎖された1760年代以降一貫しているのならば、イタリアから戻った後は例外的な事案についてしか枢密会議に参加していないゲーテが、周知の政策をわざわざ繰り返す必要はないのであり、イエーナのロッジ設立が当時の政治状況と密接に関わる問題であったことを示しているのだという³²⁾。

パウアーとミュラーはイエーナのロッジを認めない理由をフランスとの関係に求める³³⁾。プロイセン側について1806年のイエーナとアウエルシュテットの会戦で敗れたヴァイマルは、ライン同盟に組み込まれ、スパイに監視されていた。「フランス人たちが侵入してきた際、彼らがフリーメイソンリーを重んじ、愛着を感じ、しばしばこれを仲立ちにして宥められるのをいくつかの例に認めることができ、われわれの国でもこの古いお守りを探し出したいという皆の願望が起こったのだ」³⁴⁾。ゲーテは所見の中でこう述べ、ロッジ設立申請をフランスの占領をきっかけにフリーメイソンの価値を再認識したことにあるとしている。このようにフランスを意識しなければならぬ状況下で、イエーナのロッジの設立が計画されたのであるが、問題はロッジの設立発起人たちが君主の許可を得る

前に、ゴータやプロイセンとの関係を結んでしまったということである³⁵⁾。すでにプロイセンではフランス人に対する諜報ネットワークを組織し始めていたことを考慮すれば、ベルリンの「3つの地球」ロッジ傘下のロッジ設立を領内に認めることは、フリーメイソンを通じた反フランスのネットワークを作ろうとしているという嫌疑をかけられる可能性がある。これは当時ヴァイマルが置かれていた政治状況では極めて危険であると言わざるを得ない。ヴァイマル政府の高官としてゲーテが国家の安全のためにプロイセン色を極力排除しようとしたのは当然なのである。パウアーとミュラーもまたゲーテがルードルシュタットのロッジとの繋がりでヴァイマルのロッジ再開を提案していることに注目する。ゲーテは必ずしもロッジ設立を全面的に禁止せよと述べているわけではないのである。こうした点から、パウアーとミュラーはゲーテの態度を反フリーメイソンではないと結論付ける³⁶⁾。

政治家として、ゲーテはその時々の内政上、外政上の状況を踏まえて政策判断をしているのであるが、個人としての結社に対する態度はより複雑である。フランスのマリー・アントワネットを巻き込んだ「首飾り事件」に想を得て成立した『大コフタ』*Der Groß Cophta* (1791)では秘密結社のまやかしを暴露しており、反秘密結社的な態度を読み取ることができるが、『メールヒェン』*Das Märchen* (1795)や『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』*Wilhelm Meisters Lehrjahre* (1795-96)では、イニシエーションが主題となっている。ゲーテは結社のネットワークには政治家として危険性を認めざるを得ないが、秘密結社の本質である儀礼については、ゲーテの人間観に通底するものがあるのである³⁷⁾。

2.2 学生結社

ゲーテのフリーメイソンについての所見でもうひとつ見過ごしてはならないことがある。それはロッジ設立を拒否されたのが大学都市イエーナであるという点である。

[...]ひとつ考慮しておく、もしそのような結社が

大学と一致したならば、両者はそれによってますます力を獲得し、それから力を政府に向けるかどうかは彼ら次第で、メンバーたちの思想や判断によるということになるだろう。[...]学生のために生じる危険を全く考えていない、このことは常に以前は要点であったし、そのためにイエーナでは全てのメイソンの関係が拒絶されたのであった³⁸⁾。

この所見の中でゲーテはフリーメイソンと大学との結び付きを、とりわけ学生との結び付きを懸念している。彼はなぜ学生に神経を尖らせなければならなかったのだろうか。

イエーナではフリーメイソンのロッジが大学の構成員を中心に展開したが、高位階の普及と共に学生が経済的にフリーメイソンから排除されていき、代わって個人の完成といった新しい要求の受け皿となったのが擬似メイソンのアカデミック・ロッジであったことはすでに述べた。しかし、こうした結社によって、それ以前から存在していた学生の地縁的な結び付きである同郷人会がなくなってしまったわけではない。依然として同郷人会は存続していたし、そこからさらに学生結社 (Studentenorden) が派生していた。1770年代後半にギーセンで大学生活を送ったラウクハルト (Friedrich Christian Laukhard, 1758-1822) は、1770年頃にイエーナで設立されてギーセンにも勢力を伸張していた学生結社「友情団」(die Amicisten) について自伝で言及している。彼によれば、最初は秘密であった結社も次第に公然と特別の帽章をつけて結社員と結社員以外を区別していたという³⁹⁾。

私は入団前にこういう団体の本質を知っていたら、決して入会などしなかっただろう。事は要するに兎に類することや出たらめ、自惚れからなる代物で、まともな者ならすぐに腹立たしくなるに違いない。規約は全て貧弱な、ゴタゴタした、まるでドイツ語になっていない文章で綴られているから、その迷路から抜け出すのは一苦労だ。一群の若者が秘密結社を設立しようというのがそもそもとんでもない考え違いで、ましてやその目的がもっぱら最高に羽振りをきかせようということであり、その首領の大学生は結社内であつてのイエズス会総長のような

権力を行使するというのである。一部に聞きたくない者もいようが、私は真実を認め、率直に大学のいわゆる結社がばかばかしい団体であると言わざるをえない。もう少しこの件に光を当ててみよう⁴⁰⁾。

ラウクハルトは続けて結社の規約を具体的に挙げていくが、結社の求める友情や協調は結社が羽振りを利かせるための団結に必要なものだとし、さらに結社の首領が一般会員を召使同然に利用していることを指摘している。しかも、彼はギーセン以外の様々な大学を訪れた経験から、どの結社も「全て肝心な部分は互いに一致している」⁴¹⁾とし、学生結社の本質が大学で羽振りをきかせることに過ぎないと喝破している。

こうした学生結社は学生の移動に伴って各地の大学へと拡大していく。ラウクハルト自身イエーナの学生と共にマインツで9人の学生を友情団に入会させたことを述べているが⁴²⁾、学生の移動による結社の拡大はイエンス・リーデラーによるイエーナの「不変団」(die Konstantisten) のメンバーの統計的分析からも明らかである⁴³⁾。イエーナでは1794年から96年にはロストックからのメンバーが目立ち、弱体化した結社の強化に力を貸すなど、結社の拡大や強化を目的とした移動すら行われていたのである⁴⁴⁾。

もっともこうした学生結社は、ナポレオン軍に対する解放戦争を経て「ドイツ」という意識に芽生えて1817年にヴァルトブルクで全国集会を開いたブルシェンシャフト(Burschenschaft)とは違って、社会的にアピールする主張を持っていたわけでもなければ、連帯して行動していたわけでもなかった。学生結社には学生の移動によって築き上げられたネットワークが存在するものの、結社の目的は大学内での地位向上にあったために、他の都市の学生と結び付いた広域の統一行動には結び付かなかった。その意味では、ヴァイマル公国という国家の中に、プロイセンという別の国家権力との関係を導入しようとした1807年のイエーナのロッジ設立問題とは問題の所在が異なるように思われる。しかし、1792年6月には60~70人の学生が大学長代理宅に投石した小さな叛乱も起こっている

し、同年7月には300人規模の学生が大学の自由を求めて「行軍」したりもしている。学生の改革グループは、当時蔓延していた決闘を自主的に解決するために、学生による名誉法廷を設置することと、旧来の結社や同郷人会を廃棄して新たに本来的な同郷人会を設置することを提案し、国家権力からの学生の自律を保持しようとしたのだが、これを政府に拒絶されたことが「行軍」の原因であった。秘密に運営される、完全に独立した学生組織は、臣下の独立組織を望まぬ君主の意思に反するものであった⁴⁵⁾。これはまさしくゲーテが1807年の所見で表明した「国家の中の国家」に対する懸念に繋がるものである。

学生が結社として団結することは専制君主にとって国家統治の上での大きな不安要因であったことは間違いない。さりとて大学都市イエーナの経済を支えている大学自体を廃棄するわけにもいかない。専制君主およびその政府高官の対応としては学生結社を禁止し、学生の危険性を回避するために、大学都市でのロッジ設立には慎重にならざるを得なかったのである。

3 大学と秘密結社

3.1 ラインホルト

これまで見てきたように、専制国家にとって秘密結社は不安要因である。しかし、文化史上秘密結社が持っていた役割を、これはもちろん今日の我々の視点での評価であるが、決して無視することは出来ないのである。

ここではイルミナーティとこの大学都市との関係を見ておきたい。ヘルマン・シュトラークが編纂したイルミナーティのメンバー一覧には、イエーナ（結社ではSiracusaと呼ばれていた）の支部のメンバーとして確認が取れた14名を挙げているが、その内の5人が教授、4人が学生である⁴⁶⁾。その中に『カント哲学についての書簡』*Briefe über die Kantische Philosophie*（1787）でカント哲学の解説者として名声を博したラインホルト（Karl Leonhard Reinhold, 1757-1828）も含まれている。しかも、彼の生涯はイルミナーティと密接に結び付いているの

である。

1757年10月26日⁴⁷⁾にラインホルトはウィーンで生まれ、1772年にイエズス会の修練士となる。翌年には教皇クレメンス14世によるイエズス会禁令によって修道会が解散されると、バルナバ会に加入する。彼はこの会の伝統に従って哲学と神学を3年間学び⁴⁸⁾、1780年に聖職者となりバルナバ会神学院の哲学教師となる。しかしこの頃文学的な関心からデーニス（Michael Kosmas Denis, 1729-1800）と知り合い、オーストリアの啓蒙主義者たちと交流するようになる⁴⁹⁾。そしてこうした交流の中でブルーマウアー（Aloys Blumauer, 1755-1798）に出会い、彼の編集する雑誌『レアルツァイトゥンク』*Realzeitung*で批評家として働くことになる。この雑誌はウィーンのフリーメイソンロッジ「真の団結」（Zur Wahren Eintracht）の精神的影響下にあり、この批評活動を通じてラインホルトはますますロッジと密接な関係を築き、1783年4月30日にはついに結社の一員となる。ロッジ「真の団結」はイルミナーティの「人材養成学校」として機能しており⁵⁰⁾、「同じ年、彼は『デツィウス』（Decius）という匿名でイルミナーティの結社でのキャリアをはじめるのである」⁵¹⁾。

1783年11月19日にラインホルトはバルナバ会修道院を抜け出し、ライプツィヒに向かう。フクスはラインホルトが修道院から逃げ出した理由として、理性に基礎を置き、啓蒙と結び付いた「真の」信仰と修道院の現実との葛藤があったこと、結社への帰属や雑誌での評論活動が発覚する危険性が常にあったこと、そして結婚問題を挙げている⁵²⁾。

このラインホルトの逃走は計画的なもので、彼の周囲は事前にこの計画を知っており、11月7日にラインホルトが最後にロッジを訪れたときにはフォン・ベニグニ（von Benigni, 生没年不詳）が『兄弟ラインホルトの出発を巡る気持ち』*Empfindungen über die Abreise des Bruders Reinhold*という講演を行っていたのである⁵³⁾。しかも、この逃避行に際しては結社の意向が強く働いている。ラインホルトはライプツィヒ大学でしばらく聴講した後、1784年4月イグナーツ・フォン・ボルン（Ignaz von Born,

1742-1791)の手紙に従って、ライプツィヒを離れ、ヴィーラント(Christoph Martin Wieland, 1733-1813)への紹介状を携えてヴァイマルへ向かう。その際、ウィーンのロッジの仲間が経済的に支援している⁵⁴⁾。

ヴィーラント自身はこの時点ではフリーメイソンにすら加入していなかった⁵⁵⁾、ラインホルトの逃走支援を秘密結社のネットワークだけに限定することはできない。もちろんボルンらウィーンの結社員たちの持つネットワークを啓蒙主義者として築いたネットワークと秘密結社のネットワークといったように区別できるものではない。それは渾然一体となったものであって、ボルンやブルーマウアーらのネットワークから秘密結社をあえて排除するわけにはいかないのである。

しかもヴィーラントが発行していた雑誌『ドイツ・メルクール』*Teutscher Merkur*にはウィーンの「真の団結」ロッジのメンバーが多く寄稿しており、この雑誌とフリーメイソンやイルミナーティたちの結社や意図との結び付きが指摘されている⁵⁶⁾。そして1784年5月初めにヴァイマルに到着したラインホルトは、早くも6月にはこの雑誌の協力者となっている。彼はヴァイマル到着後、イルミナーティの中心人物であるボーデとも結社活動や私生活で密接な繋がりを持つ。ボーデはラインホルトの娘カロリーネ・フリーデリケ(Karoline Friederike, 1786年生まれ)の名付け親となっているし、頻繁に相互訪問、文通をしている。さらに、ベルリンのニコライにラインホルトを紹介したのもボーデであり、ラインホルトはニコライの雑誌で批評家としても活動している⁵⁷⁾。

ラインホルトとウィーンの結社との関係は、ラインホルトがヴァイマルに移ってからも続いている。ヴァイマルに移ったラインホルトがウィーンの結社の仲間たちからも指導されていたことが、ボーデに宛てたとみられる次のメモから推測される。「同封の手紙をたった今ローマから受け取りました。[私] デツィウスは次にお伺いする時についてご命令をお待ちしております」⁵⁸⁾。デツィウスとは、すでに述べたようにラインホルトの結社での名前であり、ローマは、イルミナーティの中ではウィーンのことであ

る。さらに同じような手紙があり、そこには鉱物学者でもあるボルンが発見したアマルガム法について報告しているウィーンからの手紙が添付されている⁵⁹⁾。結社のネットワークは都市と都市とを結ぶ情報のネットワークにもなっており、ラインホルトはウィーンとヴァイマルという2つの都市を結ぶイルミナーティ・ネットワークの結節点でもあったのである。

結社のラインホルト支援はさらに続く。彼は1787年にイエーナ大学の員外教授(哲学)に任命されるが、この招聘に際しては、確かに『カント哲学についての書簡』でもってカント哲学の解説者として広くドイツの教養層に受け入れられたことが大きな要因とはなっているが⁶⁰⁾、それだけではなくイルミナーティの結社の支援があったとみられている⁶¹⁾。ラインホルトの任命に先立ってはヴァイマル政府高官のフォイクト(Christian Gottlob von Voigt, 1743-1819)が彼を支援しており、ラインホルトとフォイクトとの交友はイルミナーティの結社を介したものであると考えられているし、やはりイルミナーティであったヘルダーも1787年1月4日付の書簡でカール・アウグストにラインホルトを推薦している⁶²⁾。

このように、若きラインホルトはイルミナーティのネットワークの支援を受けながら活躍の場を提供され、その才能を開花させていったのである。もちろんラインホルトは結社のネットワークに属していることの恩恵を一方的に享受していたわけではなく、イルミナーティの一員としてもヴァイマル、イエーナで活動していた。彼はイエーナのイルミナーティの指導的なメンバーであった。イエーナ大学の教授として彼は多くの若者を惹きつけるが、そうした学生の中で結社に相応しいと思われる者を結社に勧誘していた。フクスはそうした学生としてツェルプスト出身のウンガー(Georg Theophil Unger, 生没年不詳)を挙げ、他にミヒャエリス(Christian Friedrich Michaelis, 1770-1834)やフォン・ヘルベルト(Franz de Paula von Herbert, 1759-1811)も勧誘されたものと推測している⁶³⁾。

また、ラインホルトは1794年にイエーナ大学を去った後も結社への関心を失ったわけでは

ない。ラインホルトと親しく付き合っていたボーデが、イルミナーティの活動としてフリーメイソンの改革を目指していたことはすでに述べた。ラインホルトはキールに移ってからボーデの目指したフリーメイソン改革に取り組み、1804年には各ロッジへの回状を用いて「道徳団」(moralischer Bund)のプランを提示し、議論を引き起こしている⁶⁴⁾。その後は1809年に再開されたヴァイマルのロッジ「アマーリア」に参加し、1820年にはキールのロッジ「ルイーゼ、冠を戴いた友情」(Luise zur gekrönten Freundschaft)の再開に加わり、その死までロッジ・マスターを務めている。

3.2 シラーとイルミナーティ

ラインホルト同様に、イルミナーティのネットワークがヴァイマル、そしてイエーナに呼び寄せたと推測される人物がいる。それはフリードリヒ・シラー (Friedrich Schiller, 1759-1805) である⁶⁵⁾。シラーの出世作『群盗』*Die Räuber*

(1781)の出版を仲介したのはイルミナーティのペーターゼン (Johann Wilhelm Petersen, 1785-1815) であり、この劇の初演を引き受けたマンハイムの劇場総監督ダールベルク (Wolfgang Herbert Dalberg, 1750-1806) はヴォルムスのロッジ・マスターで、当時このロッジはイルミナーティによる乗っ取りが進行していたという。シラーはマンハイムで座付き作者となるが、1年の契約は更新されなかった。その背後にはヴォルムスのロッジ内のイルミナーティ勢力とダールベルクとの決裂があるのではないかと推測される。

シングスはシュトゥットガルトのイルミナーティ人脈についての論考で若きシラーへのイルミナーティの影響を考察しているが、その中でシラーがヴァイマル、イエーナへ至る道でもイルミナーティの影響を示唆している⁶⁶⁾。とりわけヴァイマルは、すでに述べたように結社の解散宣言後もボーデを中心としたイルミナーティ活動継続の中心地であった。しかも、シラーに奨学金を与え『人類の美的教育について』*Über die ästhetische Erziehung des Menschen in einer Reihe von Briefen* (1795)の完成を支援してくれたシュレースヴィヒ=ホルシュタイン=

ゾンダーブルク=アウグステンブルク公子フリードリヒ・クリスティアン (Friedrich Christian von Schleswig-Holstein-Sonderburg-Augstenburg, 1765-1814) は、バイエルンから亡命して来た結社の首領ヴァイスハウプトを経済的に支援していたのである⁶⁷⁾。公子はシュトラのメンバー一覧では「1787年以降イルミナーティのシステムを知り非公式メンバー」⁶⁸⁾であるとされているし、公子にシラーへの奨学金を仲介したデンマークの詩人バグゲセン (Jens Baggesen, 1764-1826) もイルミナーティである⁶⁹⁾。そしてシラーの窮状をバグゲセンに伝えたのは、やはりイルミナーティであったラインホルトであり⁷⁰⁾、シラーへの経済支援のために動いた人脈もまたイルミナーティのネットワークと重なるのである。

おわりに

イエーナもまた他のドイツの都市同様に18世紀の中頃には秘密結社が興隆したのであるが、大学が大きな位置を占めるこの都市にあっては、フリーメイソンのロッジは大学と結び付いて発展していった。しかし、高位階の普及に伴い、学生は本来のフリーメイソンからは経済的に排除されていき、地縁的な結合である同郷人会やそこから派生した学生結社へと戻っていくことになる。イエーナを監督する立場にあったヴァイマル政府は、その高官であったゲーテを含め、学生の結社活動を禁じ、学生との結び付きを恐れてフリーメイソンのロッジ設立も認めない立場にあった。イエーナの秘密結社の歴史を眺めると、学生への対応に苦慮するヴァイマル政府の姿が浮かび上がってくるのである。

しかし、すでに見てきたように、厳守派を受け継いでフリーメイソン改革を目指したヴァイマルやゴータのイルミナーティの影響圏内にあったイエーナのイルミナーティは、大学教授を中心に、学生らもメンバーに加えていた。そして、このイルミナーティのネットワークは、ラインホルトやシラーといった、活躍の場を見出せずに困窮する有為な人材をヴァイマル、そしてイエーナに呼び寄せ、活躍の場を提供する

ことで経済的に支援した人脈と重なるのである。特に、ラインホルトの生涯からは、ウィーン、ヴァイマル、イエーナ、さらにはベルリン、キールを結ぶネットワークの存在が浮かび上がってくる。18世紀文化を形成した情報ネットワークとして、書籍・雑誌の流通や文通、旅行についてはしばしば指摘されてきたが、そうしたネットワークには、秘密結社が結ぶ人的ネットワークも組み込まれているのであって、18世紀文化を考察する際に、我々は秘密結社のネットワークの存在を決して過小評価してはならないのである。

注

1. Friedrich Nicolai: *Beschreibung einer Reise durch Deutschland und die Schweiz im Jahre 1781*. 1. Band. S. 50. In: ders.: *Gesammelte Werke*. Herausgegeben von Bernhard Fabian und Marie-Luise Spieckermann. Bd. 15. Reprographischer Nachdruck der Ausgabe Berlin und Stettin 1783. Hildesheim, Zürich, New York 1994.
2. 成瀬治, 山田欣吾, 木村靖二編『世界歴史大系ドイツ史 2—1648～1890年—』山川出版社 1996年, 152頁参照。
3. Nicolai: a.a.O., S. 50f.
4. ただし, 指導的メンバーが大学ないしはイエーナを離れたため許可が無効となり, 1746年4月に新たに政府の許可を申請している。
Vgl. Joachim Bauer: *Freimaurerei, Geheimgesellschaft und Studenten in Jena zu Beginn der zweiten Hälfte des 18. Jahrhunderts*. In: Joachim Bauer und Jens Riederer(Hgg.): *Zwischen Geheimnis und Öffentlichkeit. Jenaer Freimaurerei und studentische Geheimgesellschaften*. Jena, Erlangen 1991, S. 20.
5. Vgl. ebd., S. 19.
6. Vgl. ebd., S. 21.
7. Vgl. Richard van Dülmen: *Die Gesellschaft der Aufklärer. Zur bürgerlichen Emanzipation und aufklärerischen Kultur in Deutschland*. Frankfurt am Main 1986, S.59.
8. フリーメイソンというと徒弟, 職人, 親方の3位階を想起しがちであるが, 実際には様々な位階システムがあり, 基本3位階の上に高位階が用意されていた。
9. Vgl. Eugen Lennhoff, Oskar Posner, Dieter A. Binder: *Internationales Freimaurer Lexikon*. Überarbeitete und erweiterte Neuauflage der Ausgabe von 1932. München 2000, S. 439.
10. Vgl. W. Daniel Wilson: *Unterirdische Gänge. Goethe, Freimaurerei und Politik*. Göttingen 1999, S. 30.
11. Vgl. ebd., S. 31f.
12. Vgl. Bauer: a.a.O., S. 31.
13. Vgl. ebd., S. 32.
14. Vgl. ebd., S. 33f.
15. Vgl. ebd., S. 38.
16. *Goethes Amtliche Schriften*. Veröffentlichung des Staatsarchivs Weimar. 2. Band. 2. Halbband: 1798-1819. (=AS II/2) Bearbeitet von Helma Dahl. Weimar 1970, S. 776.
17. エンゲルハルト・ヴァイゲル『啓蒙の都市周辺』三島憲一, 宮田敦子訳 岩波書店 1997年, 278～285頁参照。
18. Vgl. Hermann Schüttler: *Karl Leonhard Reinhold und die Illuminaten im Vorfeld der Französischen Revolution*. In: Helmut Reinalter (Hrsg.): *Der Illuminatenorden (1776-1785/87). Ein politischer Geheimbund der Aufklärungszeit*. Frankfurt am Main 1997, S. 331.
19. Vgl. ebd.
20. AS II/2, S. 776.
21. Vgl. Hermann Schüttler: *Joachim Christoph Bodes Wirken im Illuminatenorden*. In: Helmut Reinalter (Hrsg.): *Der Illuminatenorden (1776-1785/87). Ein politischer Geheimbund der Aufklärungszeit*. Frankfurt am Main 1997, S. 310.
22. ヴァイスは実際的な活動期間を1776～1785年の10年間としており, 後継組織も1790年以降には消えていくと考えている。
Vgl. Eberhard Weis: *Der Illuminatenorden (1776-1786). Unter besonderer Berücksichtigung der Fragen seiner sozialen Zusammen-*

- setzung, seiner politischen Ziele und seiner Fortexistenz nach 1786. In: Helmut Reinalter (Hrsg.): *Der Illuminatenorden (1776-1785/87). Ein politischer Geheimbund der Aufklärungszeit*. Frankfurt am Main 1997, S. 240.
23. Vgl. Schüttler: *Joachim Christoph Bodes Wirken im Illuminatenorden*, S. 315.
24. Vgl. Hermann Schüttler: *Die Arbeiten des Illuminatenordens im norddeutschen Raum vor und nach den bayerischen Edikten von 1784/85*. In: Helmut Reinalter (Hrsg.): *Der Illuminatenorden (1776-1785/87). Ein politischer Geheimbund der Aufklärungszeit*. Frankfurt am Main 1997, S. 181.
25. Vgl. Schüttler: *Joachim Christoph Bodes Wirken im Illuminatenorden*, S. 317.
26. *Goethes Amtliche Schriften*. Veröffentlichung des Staatsarchivs Weimar. 2. Band. 1. Halbband: 1788-1797. (=AS II/1) Bearbeitet von Helma Dahl. Weimar 1968, S. 146.
27. Vgl. Hermann Schüttler: *Die Mitglieder des Illuminatenordens. 1776-87/93*. München 1991, S.226.
28. Vgl. Schüttler: *Joachim Christoph Bodes Wirken im Illuminatenorden*, S. 315.
29. AS II/1, S. 146.
30. AS II/2, S. 778.
31. Vgl. Wilson: a.a.O., S.64.
32. Vgl. Joachim Bauer u. Gerhard Müller : „Des Maurers Wandeln, es gleicht dem Leben“ *Tempelmaurerei, Aufklärung und Politik im klassischen Weimar*. Rudolstadt, Jena 2000, S. 58.
33. Vgl. ebd., S. 59ff.
34. AS II/2, S. 776.
35. Vgl. AS II/2, S. 777.
36. Vgl. Bauer u. Müller: a.a.O., S. 61.
37. ゲーテの作品における儀礼の問題については、以下の論文を参照のこと。
北原博『イニシエーション小説としての「ヴィルヘルム・マイスターの修業時代」』 阪神ドイツ文学会『ドイツ文学論攷』第 XXXXI 号 (1999), 61~80 頁。
北原博『ゲーテのロジック詩』 日本ゲーテ協会『ゲーテ年鑑』第 44 巻 (2002), 131~147 頁。
38. AS II/2, S. 778.
39. フリードリヒ・クリスティアン・ラウクハルト『ゲーテ時代のひとつの断面—自伝「人生の有為変転」—』上西川原章訳 三修社 1994 年, 70 頁参照。
40. 前掲書, 71 頁参照。
41. 前掲書, 73 頁参照。
42. 前掲書, 94 頁参照。
43. リーデラーは「不変団」のメンバーの学籍登録を調査し、イエーナに来る前、イエーナを去った後の大学登録状況、「不変団」での活動の有無を電算処理して分析している。
Vgl. Jens Riederer: *Die Jenaer Konstantisten und andere Studentenorden an der Universität Jena im letzten Drittel des 18. Jahrhunderts. Eine statistische Untersuchung*. In: J. Bauer und J. Riederer (Hgg.): *Zwischen Geheimnis und Öffentlichkeit. Jenaer Freimaurerei und studentische Geheimgesellschaften*. Jena, Erlangen 1991, S. 42-109.
44. Vgl. ebd., S. 52.
45. Vgl. W. Daniel Wilson: *Das Goethe-Tabu. Protest und Menschenrechte im klassischen Weimar*. 2. Auflage. München 1999, S. 180.
46. Vgl. Schüttler: *Die Mitglieder des Illuminatenordens*, S. 210.
47. 多くの事典類では 1758 年生まれとされており、本人も自分の履歴等にそのように記述しているが、1983 年に出生及び洗礼記録から 1757 年に訂正されている。
Vgl. Wolfgang Fuchs: *Karl Leonhard Reinhold - Illuminat und Philosoph in Jena*. In: J. Bauer und J. Riederer(Hgg.): *Zwischen Geheimnis und Öffentlichkeit. Jenaer Freimaurerei und studentische Geheimgesellschaften*. Jena, Erlangen 1991, S. 202.
48. Vgl. Schüttler: *Karl Leonhard Reinhold und die Illuminaten im Vorfeld der Französischen Revolution*, S. 325.
49. Vgl. Fuchs: a.a.O., S. 206.なお、ラインホルトを文学に誘ったのはバルナバ会神学院の恩師ペパーマン(Paul Pepermann, 生没年不詳)であった。Vgl. ebd., S. 205.

50. Vgl. Helmut Reinalter: *Ignaz von Born und die Illuminaten in Österreich*. In: ders. (Hrsg.): *Der Illuminatenorden (1776-1785/87). Ein politischer Geheimbund der Aufklärungszeit*. Frankfurt am Main 1997, S. 365.
51. Fuchs: a.a.O., S. 208.
52. Vgl. ebd., S. 216.
53. Vgl. ebd., S. 215f.
54. Vgl. Schüttler: *Karl Leonhard Reinhold und die Illuminaten im Vorfeld der Französischen Revolution*, S. 326. Fuchs: a.a.O., S. 222.
55. ヴィーラントのフリーメイソン加入は 1809 年である。なお、彼の追悼ロジではゲーテが演説をしている。
56. Vgl. Fuchs: a.a.O., S. 221.
57. Vgl. ebd., S. 237.
58. Zit. nach Fuchs: a.a.O., S. 241.
59. Vgl. ebd.
60. 彼の名声はイエーナ大学の学生数の増加に貢献している。Vgl. ebd., S. 229.
61. Vgl. Schüttler: *Karl Leonhard Reinhold und die Illuminaten im Vorfeld der Französischen Revolution*, S. 326f.
62. Vgl. Fuchs: a.a.O., S. 225f.
63. Vgl. ebd., S. 244ff.
64. Vgl. ebd., S. 248.
65. 以下、シラーとイルミナーティの関係については下記の論文を参照した。石川實『シラーと秘密結社イルミナーティ』大阪産業大学産業研究所『産研叢書 3 二つの世紀転換期における文学と社会』1995年, 83~110頁。ここでは特に 92~96 頁を基にした。
66. Vgl. Hans Jürgen Schings: *Die Illuminaten in Stuttgart. Auch ein Beitrag zur Geschichte des jungen Schiller*. In : *Deutsche Vierteljahrsschrift für Literaturwissenschaft und Geisteswissenschaft*. 66. Heft 1(1992), S. 50.
67. 石川, 前掲論文, 95 頁参照。
68. Schüttler: *Die Mitglieder des Illuminatenordens*, S. 54.
69. Vgl. ebd., S. 17. シュトラーによれば, バッゲセンは 1790 年頃, ボーデからイルミナーティを知ることになる。バッゲセンは当時見聞旅行の途上であり, ヴィーラントやラインホルトとも知り合っている。シラーとの交流が始まるのもこの時で, 紹介したのはラインホルトである。Vgl. Peter Lahnstein: *Schillers Leben*. München 1981, S. 294.
70. Vgl. Lahnstein: a.a.O., S.307f.

The Secret Societies in Jena

Hiroshi KITAHARA

This article consists of three parts: a history of the Freemasons and other secret societies in Jena, of the attitude of the Weimar Government toward them and finally of the cultural-historical meaning of secret societies in the 18th century.

In Jena, as in other cities in Germany, secret societies particularly flourished in the second half of the 18th century. For Jena it was characteristic that members of such orders had close relations with the university. With the introduction of the higher-degree system, students were excluded from the Order of Masons, and they entered the homeland associations or students' orders. The Weimar Government, which governed Jena, and also its dignitary Goethe, prohibited establishing secret societies there because of the danger to the students.

The Illuminati there, whose center was Weimar and Gotha after the public dissolution of the Order, tried to accept university professors and students into the Order. Its network corresponds to a personal connection, which could support talented young people who were distressed financially and help them to get jobs in Weimar or Jena. We can recognize the network, which connected Vienna, Weimar, Jena, and even Berlin and Kiel, from the personal records of Reinhold. Publications, journeys and exchanges of letters have been regarded as an information network developing in 18th century culture, but we should not disregard the fact that secret societies also belonged to this network.

Keywords : secret society, Freemasons, Jena, Goethe, Reinhold